

公衆衛生学

1 構 成 員

	平成 13 年 3 月 31 日現在
教授	1 人
助教授	1 人
講師（うち病院籍）	0 人 (人)
助手（うち病院籍）	2 人 (0 人)
医員	0 人
研修医	0 人
大学院学生（うち他講座から）	2 人 (0 人)
研究生	6 人
外国人客員研究員	0 人
技官	0 人
その他（技術補佐員等）	1 人
合計	13 人

2 教官の異動状況

- 竹内 宏一（教授）（期間中現職）
 金森 雅夫（助教授）（期間中現職）
 甲田 勝康（助手）（期間中現職）
 中村 晴信（助手）（期間中現職）

3 研究業績

	平成 12 年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	8 編 (2 編)
そのインパクトファクターの合計	17.845
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	1 編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編 (編)
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	1 編 (1 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	6 編 (6 編)
(6) 国際学会発表数	1 編

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Katsuyasu Kouda, Toshiro Tanaka, Mitsuo Kouda, Akira Takeuchi, Hiroichi Takeuchi,

Harunobu Nakamura, Masahiro Takigawa. Low-energy diet in atopic dermatitis patients: clinical findings and DNA damage. Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY and Applied Human Science 19 (5), 225-228, 2000

2. WenYing Fan, Kazunori Ogusu, Katsuyasu Kouda, Harunobu Nakamura, Hiroto Ochi, Tomoaki Sato, Hiroichi Takeuchi. Reduced oxidative DNA damage by vegetable juice intake: a controlled trial. Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY and Applied Human Science 19 (7), 287-289, 2000
3. 新宅幸憲, 市木美知子, 臼井永男, 乾 道生, 赤塚 勲: 子どもにおける片足立ちと足底面の関連性について.大阪成蹊女子短期大学研究紀要 No.38. 2001.

インパクトファクターの小計 [0]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. You-Jie Wang, Sueli M. Oba Shigeto Yoshii, Jian-Ping Song, Ying Wang, Masao Kanamori, Satoshi Ota, Masamitsu Tanaka, Haruhiko Sugimura: Genomic structure of human alpha-pix, and variable deletions in a poly(T)tract in gastric cancer tissue. Cancer Letters 164 (2001)69-75.
2. Tetumei Urano, Yuko Suzuki, Mikako Arakida, Masao Kanamori, Akikazu Takada: The expression of exercise-induced tPA activity in blood is regulated by the basal level of PAI-1. Thromb Haemost 2001;85:751-2.
3. Jiangzhen Li, Akira Kondo, Masato Maekawa, Masao Kanamori and Takashi Kanno. Hypertriglyceridemia Characterized by Low-Density Lipoprotein Phenotype and Lipoprotein Lipase Gene Mutation Clin Chem Lab Med 38(12):1263-1270,2000
4. 鈴木みずえ, 金森雅夫: 老人施設における転倒・骨折予防のための生活指導, 生活援助. 骨・関節・靭帯 13 (3) :831-839, 2000.

インパクトファクターの小計 [7.585]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Hidekazu Nishigori, Hideaki Tomura, Naoko Tonooka, Masao Kanamori, Shirou Yamada, Kimie Sho, Ituro Inoue, Nobuyuki Kikuchi, Kazumichi Onigata, Itaru Kojima, Tomoko Kohama, Kazuya Yamagata, Qin Yang, Yuji Matsuzawa, Takashi Miki, Susumu Seino, Mi-Young Kim, Hueng-Sik Choi, Yoon-Kwang Lee, David D.Moore, and Jun Takeda. Mutations in the small heterodimer partner gene are associated with mild obesity in Japanese subjects. PNAS 98(2)575-580,2001

インパクトファクターの小計 [10.260]

D. 筆頭著者、共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが、当該教室に所属する者が含まれるもの

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Kanamori M., Schnell A.H., Inoue M., Yamamura Y., Shinmura K., Yokota J., Tajima K., Elston R.C., Sugimura H.: Sagregation analysis on gastric cancer in Japan. The Proceedings of 4th International Gastric Cancer Congress (editors Murray F., Brennan & Martin S. Karpeh) pp617-622, Monduzzi Editore, Bologna, Italy, 2001, April.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

D. 筆頭著者、共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが、当該教室に所属する者が含まれるもの

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

D. 筆頭著者、共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが、当該教室に所属する者が含まれるもの

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 竹内宏一：学校保健. 新簡明衛生公衆衛生 第4版. 南山堂 167-177, 2001.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

D. 筆頭著者、共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが、当該教室に所属する者が含まれるもの

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 竹内宏一, 甲田勝康, 中村晴信: 小児生活習慣病予防健診における要注意者群に対する予防教室の再検討. 小児期からの総合的な健康づくりに関する研究 平成 12 年度厚生科学研究 報告書. 2001.
2. 甲田勝康, 早川めぐみ, 深沢和代, 小松治揮, 吹野 治, 杉井和美, 森下かおり: 平成 10 年 静岡県脳卒中登録評価等事業報告書. 静岡県健康福祉部 静岡県総合健康センター 2000

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. 鈴木みずえ, 大山直美, 西堀好恵, 竹内志保美, 金森雅夫: 虚弱高齢者の転倒に関する心理的要因と日常生活動作. 平成 10 年度ジェロントロジー研究報告: 27-37,2000

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 渥美哲至, 横山徹夫, 片山容一, 杉浦明, 清水貴子, 杉山憲次, 金森雅夫. 視床下核深部電気刺激療法後のアンケートによる満足度評価. 厚生科学研究費補助金 (特定疾患対策研究事業) 報告書
2. 小島由実, 貝瀬竜一, 近藤昌子, 金森雅夫, 藤生君江. 平成 12 年度健康づくり指導者研修事業, 健康政策思索研修 (各論) 「調査・研究法」研究成果報告書 静岡県総合健康センター pp107 平成 13 年 3 月
3. 小林克巳, 金森雅夫, 大堀兼男, 竹内宏一. げっ歯類を用いた毒性試験から得られる定量値に対する新決定樹による統計処理の提案. 産衛誌. 42: 125-129.2000.

D. 筆頭著者, 共著者とも浜松医科大学に所属していなかったが, 当該教室に所属する者が含まれるもの

4 特許等の出願状況

	平成 12 年度
特許取得数 (出願中含む)	0 件

5 医学研究費取得状況

	平成 12 年度	
(1) 文部省科学研究費	2 件	(970 万円)
(2) 厚生省科学研究費	2 件	(170 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件	(万円)
(4) 財団助成金	0 件	(万円)
(5) 受託研究または共同研究	0 件	(万円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	3 件	(75 万円)

(1) 文部省科学研究費

金森雅夫 (代表者) 基礎研究(C) (2) 障害者における音楽療法の神経・内分泌学的評価手法に関する研究 170 万 (新規)

金森雅夫 (研究分担) 創成的基盤研究費 (新プログラム方式) 「糖尿病の遺伝素因の総合的解析」 800 万円 (継続) 代表者 千葉大学大学院医学研究科教授 清野進

(2) 厚生省科学研究費

竹内宏一 (担者) 小児期からの総合的な健康づくりに関する研究 30 万 (継続) 代表者 東京女子医大附属第二病院小児科教授 村田光範

金森雅夫 (分担者) 百寿者の多面的検討と国際比較 140 万 (継続) 代表者 慶応大学医学部講師 広瀬信義

6 特定研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	平成 12 年度
(1) 特別講演・招待講演回数	1 件
(2) 国際・国内シンポジウム発表数	1 件
(3) 学会座長回数	4 件
(4) 学会開催回数	0 件
(5) 学会役員等回数	16 件

(1) 学会における特別講演・招待講演

金森雅夫 生活習慣病と環境要因 第 3 2 回東海作業環境測定協会総会, 名古屋, 5 月

(2) 国際・国内シンポジウム発表

Masao Kanamori, Haruhiko Sugimura, Audrey Schnell, Manami Inoue, Kazuo Tajima, Robert C Elston, Consortium of Japanese Gastric Cancer Study Group(1978-98, Isamu Kino, deceased). Familial clustering of Japanese gastric cancer, two collections and statistical analysis. Genetic Modifiers of Cancer Susceptibility: Lessons from Human Population Studies and Mouse Models, February 25-March 1, 2001, Hyatt Regency Lake Tahoe Incline Village, Nevada,U.S.A.

(Proceedings :p29)

(3) 座長をした学会名

竹内宏一 第70回日本衛生学会 2000年4月, 大阪

竹内宏一 第43回東海学校保健学会 2000年9月, 名古屋

竹内宏一 第47回日本学校保健学会 2000年11月, 福岡

竹内宏一 平成12年度日本産業衛生学会東海地方会 2000年11月, 岐阜

(5) 役職についている学会名とその役割

竹内宏一：日本学校保健学会理事，日本公衆衛生学会評議員，日本衛生学会評議員，日本民族衛生学会評議員，日本産業衛生学会評議員，日本疫学会評議員，日本健康教育学会評議員，日本産業精神保健学会評議員，東海公衆衛生学会理事，産業衛生学会東海地方会理事，東海学校保健学会理事，日本代替・相補・伝統医療連合学会評議員

金森雅夫：日本疫学会評議員，日本衛生学会評議員，東海学校保健学会評議員

甲田勝康：東海学校保健学会 評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	平成12年度
学術雑誌編集数	0件

9 共同研究の実施状況

	平成12年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	0件

10 産学共同研究

	平成12年度
産学共同研究	0件

11 受賞(学会賞等)

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 小児習慣病予防に関する研究

静岡県I市では小児生活習慣病の予防に取り組んでいる。今回は、その予防健診で要指導と判定した児童(小学5年生)とその保護者に対して夏休みに開催してきた予防教室の在り方を再検討した。

予防教室プログラムの概要は、以下の通りである。1) 受け付けをするとともに、体脂肪率を測定する。

2) 全体会 a) 主旨説明(15分) b) 講演「小児生活習慣病予防の重要性」(30分)。3) 個別指導 a)

医師，保健婦による指導（20分）b）栄養士による指導（20分）。4）体育教師によるグループ運動指導（45分）。5）終了後，参加した児童と保護者に感想を記入してもらおう。6）3学期にその後の状況について面接指導を行う。

調査は，夏休みの教室終了後に，保護者とその子どもに対してアンケート調査を実施した。調査結果および改善すべき要点を次に記す。多くの親子が，それぞれのプログラム内容について「分かった」とする肯定的な反応を示したが，受身的な態度をとる傾向にあるので，より積極的に取り組むように教室の持ち方を改善する必要がある。次に養護教諭が本教室の計画や運営さらに学校における日常的な予防活動に対して，より主体的に取り組むように再検討する必要がある。

（竹内宏一，甲田勝康，中村晴信）

2. 学校保健における鍛錬と保護の関係

学校保健における指導内容を大別すると，保護的働きかけと鍛錬的働きかけの2つに分けられる。日本の学校保健は，保護的働きかけに比重を置き過ぎて来たと言える。子どもの尊厳を認めた上での鍛錬的働きかけは，単に健康度を向上するのみならず本人の自立心をうながし，積極的な生活態度を涵養することにつながると考えられる。

本論文で，鍛錬的働きかけが軽視された要因を考究した。まず，我が国特有の歴史的な背景について論じた。ついで，教育する側として保健指導に専門的に従事する養護教諭にまつわる要因を指摘した。さらに，鍛錬的働きかけについての科学的評価の困難性について論じた。他方，第二次大戦後における我が国の種々環境の変化による子どもの脆弱化と親の過保護による要因を述べた。

これら両者のバランスのとれた働きかけをするには，どのような基本的な考えが重要であるかを具体例を挙げて論じ，あるべき指導の方向を提示した。（竹内宏一，甲田勝康，中村晴信）

3. 成長および老化の縦断的解析及び生活習慣病の家族集積性の研究

a）昨年度に続き，膵臓アミロイド沈着で糖尿病の発症，進展に関与するとされるアミリンのS20Gはアジア人に特異的に認められる。このS20Gの変異についての成人2型糖尿病患者検索した結果，糖尿病群で優位に高値を示し，この変異が糖尿病の遺伝素因となる可能性を示唆した。b）家族性胃癌について遺伝様式を推定した結果，多因子遺伝をみとめ，性差があることが明らかとなった。（金森雅夫）

4. QOLを高めるための第3次予防研究

老人病院および，在宅障害者(児)において，音楽療法，ペットセラピー(ケア)の実践を通じての評価尺度の研究（金森雅夫）

5. アレルギー性疾患の予防における食事制限の影響

これまでに動物実験において，栄養不良をとまなわない程度の食事制限により，寿命の延長，発癌抑制，自己免疫疾患や他の炎症性疾患に対し発症抑制が確認されている。我々は，アレルギー性疾患の予防における食事制限の影響について検討する目的で，成人アトピー患者に食事制限を行い，症状の改善を確認した。また，接触性皮膚炎マウスモデルにおいて短期間の絶食がアレルギー反応を抑制することを確認した。現在このマウスモデルおよび，NcNgaマウスモデルを用いて，その抑制メカニズムについて検討中で

ある。

(甲田勝康, 中村晴信, 范 文英, 竹内宏一)

13 この期間中の特筆すべき業績, 新技術の開発

1. 野菜ジュース摂取による DNA の酸化的障害の抑制

野菜に抗酸化成分が多く含まれることはすでによく知られている。しかし, ヒトの酸化的障害の程度は種々の因子により強く影響を受け, 食品そのものの作用効果を確認した報告は少ない。我々は, 野菜ジュース摂取群と対照群の食事, 運動, 睡眠をコントロールしたうえで, 野菜ジュース摂取による DNA の酸化的障害におよぼす影響について検討し, 酸化的障害が軽減されることを確認した。

(范 文英, 小楠和典, 甲田勝康, 中村晴信, 竹内宏一)

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1. アレルギー性疾患の予防における食事制限の影響

従来, アレルギー疾患における食事制限とは, アレルギーの原因となる食物を除去するというものであった。今回我々は, 炭水化物, 蛋白質, 脂質, ビタミン類, ミネラル類の全てを全体量として制限する試みであり, 現在, 皮膚科学会, 栄養学会およびその他の学会において, このテーマについて研究しているグループはなく, 内容は我々独自のものである。当該研究は, アレルギー性皮膚炎の予防に, 生活習慣のひとつである食事を要因として持ち込み, 今後の関連した研究領域を広く展開しうるための方向づけとして, また先駆的研究としての位置付けとしての意義がある。

(甲田勝康, 中村晴信, 范 文英, 竹内宏一)

2. 分子疫学における遺伝子と環境因子との交互作用の解析 (金森雅夫)

15 新聞, 雑誌等による報道

平成 12 年 8 月 入浴と自律神経機能, 日経ヘルス

平成 12 年 8 月 朝食と血糖の変化, 日経新聞

平成 13 年 2 月 野菜ジュースの抗酸化作用, 日経ヘルス